ラブカクテルス　その５５

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その５５

【Ｎコード】

Ｎ８５９５Ｄ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は心にあるスイッチを入れてくれるようなカクテルをお作りしました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はスイッチでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は春になると思い出す。
あれは、桜がいよいよ散らし始め、街の細い路地にまで春を知らせるために、可憐なそれが舞い降りる、そんな頃の出来事。
彼と出逢った。

私はそんな出逢いがあるとも知らずに、その暖かい陽気に包まれて、当てもなく散歩がてらのウィンドショッピングを楽しんでいた。
ある細い路地へ桜の花びらに誘われて入った、その並びのショーウィンドに、その時の流行りの服が素敵な彩りをさりげなく強調して着飾っているのに、私は歩を止めて思わずガラスにへばり付き、見入っていた。
上着は白地に薄いピンクの桜の花びらが散る優しい模様が施され、膝下が丁度出るくらいのスカートは、なんとも言えない、いい若草

色をしていた。
素敵だ。今日の気分にぴったりだ。
私は元々買い物をするつもりもなかったせいもあり、財布にお金を入れていない事に後悔した。
しばらくそのガラスの前でどうするかを迷い、考えた結果、やはり今、これを買わないときっと後で服達が化けて出るに違いないと判断し、後ろ髪を惹かれながら、仕方なく銀行に急いだ。
私はもう、その時にはイメージ的に、その服を着て春風に乗り、ワルツでも踊る勢いだった。

しかし、銀行から戻って来た私の目には、丸裸になった、寒そうなマネキンがガラスごしから引きずり出されるところだった。
私は店内に走り込んだ。
勢い余って転がってしまうくらいの慌てようだった。
私はカジリ付く様にして、マネキンを持っていた店員に、さっきまで着ていたあの服がどうなったのかを聞いたが、たった今売れてしまったと、あっさり答えられるだけの返事に、私は絶望した。
仕方なく、肩を落として店の外を歩いていると、後ろから、その下りきった坂の様な肩を誰かに叩かれた。
私は何も考えずに振り返ったその時、なぜか頬に軽い痛みを感じた。
そこには見知らぬ男の人が、爽やかな笑顔と共に立っていて、その右の人差し指を私に向かって突き刺していた。
私は戸惑いながらその指を払い退けて、口を尖らせながら怒って怒鳴った。
するとその男性は初対面の私に向かって、
一目惚れのスイッチオン！
といきなり言い放った。
私は、コイツのイカれ様に、思わず言葉を失った。
そんな私の様子にはお構いなしで、男は出逢い記念の品、贈呈ですと、袋を私に手渡してきた。

私は何がなんだか分からないのに、そんな物も怪しいと、それを突き返したが、
男は、
僕も君に似合うと思うと、袋の中身を私に差し出した。
なんと、それはあの服だった。
私は固まった。
誰だ、この人。なんでこんな事になるんだ？
そして男は、私にそれを押し付けて、凄い速さで逃げるようにして、じゃあまたっ！と立ち去って行った。
私は困ったまま、その場でしばらく動けないでいた。

翌日、私は少しだけ心の端の端の端っこでそんな事を微かに気にして仕事に向かい、しかし店に着けば、何も変わらない毎日の中へと戻っているのだった。
私はレストランでウェイトレスをしている。
この辺では珍しいイタリア料理の店だ。
イタリア料理自体はそれほど珍しい訳ではないが、この辺ではそうなのだ。
そのせいか、ランチの時間は恐ろしい程忙しい。
奥様達が押し寄せて来るからである。
私はなるべくお客を待たせないようにと、少し汗ばむくらいに、緊張を持ちながら体を動かす。
それが私の唯一の運動のつもりで。
決してそれでダイエットなんて考えている訳ではないが。
しかし、そんな忙しい時間帯にも関わらず、今日は足を止められた。
その原因は、あの男だった。
新規のお客が座った席にオーダーを取りに行き、水のグラスを置いた瞬間、身に憶えがある痛みが頬に走り、上げた顔の先に、その顔があったからだ。

男は昨日と同じ爽やかな笑顔で、驚くスイッチオン！と言った。
私は半分悲鳴になった声を挙げて驚いた。
当然周りには白い目で見られ、しかし男はそんな店内の様子を気にする事もなく、私にオーダーを言い渡し、満足気にそのグラスを取った。
慌てて返事をした私は、いつもより顔に汗がにじんでいるのを気にして、とりあえず取り乱している心を落ち着かせるのに必死になった。

男は、店が忙しさを抜けて静かな雰囲気になるまで、ゆっくりとした時間を楽しみ、一息ついた私の姿を確かめると、オーダーっと言って私に手招きをした。
おっかなびっくりしながら、私は男に近くと、男は一人で来ているのに紅茶を二つ頼み、運んだ私に、向かいの席に座って欲しいと頼んできた。
何かされたら頭をひっぱたいてやると、私は片手にトレイを持ったまま、言われた通りに席に着くと、男はいきなりサイズはどうだった？と聞いてきた。
私は何のことかをなかなか理解出来ずにいると、男はショーウィンドウの服だよと、また爽やかな笑顔を作る。
私は何だか胸がキュンとなった。
そんな事は当然、顔にも出さずに貴方は誰だと尋ねると、男は言った。
思い出すスイッチオン！
そして私のオデコを、また右の人差し指で軽くつついた。
私はよく考えた。
誰だったっけ？
しかし一向に見当がつかない。
すると男は、やっぱり。と、呟き、ため息をついた。
君は気付いてないかも知れないが、僕は毎日ここでランチを食べて

いるんだ。そして毎日君を見ていた。
私はそれを聞いて、ドキッとした。
なんて事だ。
確かに私はランチの時間ときたら、忙しさのあまりにお客さんの顔さえも、よく見ていなかった気がする。
今、一人でもお客さんの顔を思い出してと言われても、皆がノッペラ坊にしか想像も出来ない。
そんな私の顔を見て男は、お得意さんの顔も覚えてなかった罰に、次の休みにデートをするようにと、男は言い、また私のオデコに人差し指を当てて、デートをするスイッチ入れたからね！と、爽やかな笑顔で、まるで私に同じような笑顔をするよう誘うかの如く、笑った。
私はまた慌てて断ったが、男はワザと小銭の会計を私に押し付け、数えている間に姿を消した。
明細書のホルダーには手際よく、待ち合わせ場所と時間が書かれたメモがはさんであった。

日曜日、それまでお得意さんだと言った男は店には姿を見せずに、私はどうしていいのか解らずにいたが、しかし結局メモの指示に従い、待ち合わせ場所へと出かけたのだった。

その日も春本番の暖かい陽気で、相変わらず桜が風に舞っていて気持ちがいい日だった。
待ち合わせ場所には、先に男が来ていた。
私は少し口を尖らせて、来ましたけど。と、無愛想を気取った。
男はそんな私を飛び上がる程に喜び、そして例の服を着ていった私を、これでもかと言わんばかりに褒めちぎった。
そんな大袈裟な男の姿に、私は笑うのを我慢していると、男はまた、右の人差し指でオデコをつついて笑うスイッチオンと、爽やかな笑

顔で言った。
私はその時、初めてスイッチが入ってしまったことを実感した。
そしてそれ以来、男は私の彼となり、積極的でいて、その割にのんびり屋さんの彼のペースで私の生活は変わっていった。
そんな中でも、彼の仕草というか、例のスイッチはあらゆる場面で私に押され、そしてそのおかげで、私は喜び、励まされ、泣き笑い、立ち直り、そして愛した。
二人のそんな関係は、とてもうまくいって、その先には幸せしかないと思われたが、しかし終わりはあったのだった。

思えば、私は基本的にはセッカチで、彼と逢ってしばらくは彼のペースに合わせていたせいで忘れていたが、気がつくと、何だかせわしなく動かないと、逆に落ち着かない自分に戻り、そんな時間やタイミングのズレで、小さい歪みが微かに出来ていく内、それが段々広がって大きくなると、二人の馴れ合いも混ざり合い、やがて別れへの原因となった。
二人のその亀裂には、彼のスイッチも効き目がなく、彼は望まなかったが、私は別れを選んだ。
そして彼は消えた。
およそ、一年弱の二人の時間は、そこで終わりのスイッチを押して幕を下ろしたのだった。
しかし、私は彼が居なくなって気付いた。
幸せとは何なのか。そしてその大切さを。
一人になってから、何かに躓く度に、私は彼にスイッチを押して欲しいと思うようになっていた。
どんな他の人と一緒になっても、あの彼の右人差し指のスイッチを押す効き目より、私を助け、癒してくれるものはなかった。
私は毎年、散る桜の季節にあの服を着てウィンドショッピングをする。
もう取り戻せない時間を辿って。

しかし、思うのだ。
どこか、この桜の季節になったら、彼と逢うことができるスイッチが、この爽やかで暖かい陽気の中にあるのではないかと。
もしそのスイッチを私が見つけられたら、今度は私がそれを押そう。
押されてばかりではなく、私も。
私は右人差し指を、ヒラヒラ散る優しい花びら達に向けて、涙を堪えながら、その奇跡が起きるスイッチを軽く押したのだった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8595d/

ラブカクテルス　その５５

2011年2月2日15時42分発行